

納得の内包的意味とそれが生じる 状況の特質について⁽¹⁾

嶋 崎 恒 雄

I. 序

ヒトが情報に接し知識を獲得していく過程は、心理学においては学習という観点から研究が進められてきた。学習は情報処理のアプローチからみるならば情報の探索、入力、体制化、貯蔵、出力という、いわゆる認知的な側面からとらえることができる。しかし伝統的には「経験により比較的永続的な行動変化がもたらされること」が学習の定義とされ、また実証的な学習研究においては、このような学習の行動的側面が主要な興味の対象となっている。学習研究におけるこの2つの大きな枠組みの間には、研究されるトピックに従って様々なバリエーションが存在する。

ヒトの学習に関して研究を行う場合、情報処理的アプローチと行動的アプローチのいずれもが有益であることは言を俟たない。しかしながらヒト（および心的過程のうえで極めてヒトと近い霊長目の一部）の学習を考える際には、メタレベルの心的過程、いわゆるメタ認知について考察の対象とすることが重要となる。メタ認知とは自己の認知活動を監視し、行動目標にそって評価し制御する心的機能を指す（たとえば Flavell & Wellman, 1977）。たとえば学習を行う場合、目標とする知識や技能についてすでにどの程度自分が獲得をしてい

(1) 本論文は鎌田美智子（1999年度関西学院大学文学部学士論文）のデータに基づいており、データの採取および分析の一部は鎌田氏の手になるものである。ここに記して感謝の意を表します。

るかに関する知識や、その知識を利用し学習の過程を制御しようとする心的能力をメタ認知と呼ぶ。このようなメタ認知の過程は情報処理的アプローチによっても、行動的アプローチによっても研究対象とすることが可能である。たとえば学習と非常に密接な関係にある「わかる」という現象に関して、主に認知心理学の観点からわが国の教育現場での例をひきつつ論じた研究（佐伯，1984）や、「わかった」という主観的体験と実際の学習，あるいは理解との関係を論じた研究（西林，1997）は、ヒトの学習研究において、そのメタ認知のレベルまでを射程に納めた研究であると考えることができる。

日常場面や学校の教育場で、学習者は自らの学習行動を、メタ認知を通じて得た様々な知識を用いて制御している。その際の直接の主要なきっかけになるのは前出の佐伯（1984）や西林（1997）でも言及されている、学習者の「わかったという感覚」であろう。では、この「わかったという感覚」は何によって生じるのであろうか？ 佐伯（1984）は後に *situated learning*⁽²⁾ と呼ばれるようになる考えの基礎である「文化への参加」がこの時に生じ、文化的価値の受容と産出が同時に生じると述べている。このような考え方は、近年の新しい学習観（Lave & Wenger, 1991 など）に発展していくものである。このような観点はたとえば学校教育の現場において、現実の様々な制約条件のもとでいかにして効果的な学習環境を設定することができるか、というような問題に貢献することができる。

それでは「わかったという感覚」はどのような条件の下で生じ、あるいはどのような条件のもとでは生じないのであろうか？ 何が「わかったという感覚」の制御変数であろうか？ このようなことを明らかにすることは、学習研究の重要な課題のひとつであると考えられる。「わかったという感覚」について、佐伯（1984）や西林（1997）、あるいは *situated learning* の多くの研究では、実際に学習が行われるフィールドでの観察という方法論がとられている。本研究は「わかったという感覚」が生じる、あるいは生じない条件という

(2) 同様のことばに *situated cognition* がありこれは状況性認知と訳されるが、*situated learning* は「状況に埋め込まれた学習」と意識されることが多い。

ことに關して、それがどのような状況の下でのことであるのか、という点に關し、質問紙による調査という方法論を用いて探索的にデータを採取することを目的としている。

「わかったという感覚」を端的にあらわす単語として「納得」という語がある。本研究ではまず納得という概念の内包的意味を、納得という語から連想することばを手がかりに探っていく。また納得が生じる、あるいは生じない状況の構造を、文章による自由回答を収集することによって探ることを目的とする。

納得に關連する研究領域として、信念 (belief) に關する研究 (たとえば Rokeach, 1968; Abelson, 1986 など) がある。この場合の信念とは納得の結果として生じる知識の構造であると捉えることのできる。また信念を形成する過程に焦点をあてた説得や洗脳に關する研究 (たとえば Schein, Schneier, & Barker, 1961; Lifton, 1961), 信念の変容と近年のわが国でのカルトとの關連を扱った研究 (西田, 1993; 1995 a; 1995 b) を挙げることができる。これらの研究は主に社会心理学の領域でなされてきたものであり、本研究での納得との關係が深いと考えられるが、領域として大きい上、納得と關係する状況の構造についての探索的研究である本研究とは直接には關係しないので、それらの研究の概観については本稿では割愛をする。

本研究ではまず納得という語の連想語を採取して、納得という概念の内包的意味を探る。また納得の生じる、あるいは生じない状況の構造を探るために、状況を記述する文章を集め、それに基づいて因子分析の手法により状況の構造を探る。このために本論文では2つの調査について報告を行う。予備調査として行われた調査1では、納得が生じる、あるいは生じない状況についての自由記述文、および納得という単語から連想する単語の収集を行った。これらの自由記述文は重複などを考慮して31の状況記述文にまとめられた。また連想単語は出現頻度をもとに30語を選択した。これらをもとに、調査1とは別の被調査者に対し、調査2を実施した。調査2では納得という言葉の持つ内包的意味を明らかにするために、「納得」という語と連想語との關係の深さを評定させた。また納得に關連する状況の構造を整理するため、それぞれの状況

記述文に書かれた状況のもとでの納得の程度の評定を行わせた。

本研究では連想語と状況記述文の2つの材料を用いて納得の内包的意味とそれが生じる状況の構造を明らかにする。その際に連想語として納得とは対極的な概念を表す語が出現することも十分に考えられる。本研究は納得に関する最初の探索的研究であるから、このようないわゆる否定的な連想語に関しても納得の内包的意味を規定するデータとして利用する。同様に状況記述文に関しても納得の生じる状況のみならず納得の生じない状況についてもデータを採取する。

II．調査 1

1．目的

調査1は納得の内包的意味を探るために用いる「納得」という語からの連想語と、納得の形成される状況の構造を探るために用いる状況の記述を、いずれも自由筆記の形式で収集することを目的とする。

2．方法

被調査者

データの分析対象となった被調査者は大学生109名（男子62名、女子47名）であり、平均年齢は21.6歳（18歳から38歳）であった。

質問紙

質問紙はフェイスシートおよび3つの質問項目からなっており、A4版の小冊子の形態で被調査者に配布された。表紙のフェイスシートには回答の記入についての教示が記され、その下部に年齢、性別、学部と学籍番号、氏名、調査年月日、連絡先の各項目を記入する欄が設けられた。フェイスシートの後ろにTable 1に示されている3つの質問項目が半ページにひとつの割合で印刷されていた⁽³⁾。印刷された質問文の下部は白紙になっており、被調査者はこの部分に自由に回答を書くように求められた。

Table 1 調査 1 での質問文

質問 1	あなたが今までに「納得できた」あるいは「納得できなかった」と感じたときの状況をできるだけ詳しく思い出してください。それはどのような状況でしたか？ できるだけ詳しく思いつく限り答えてください。
質問 2	なぜその時、「納得できた」あるいは「納得できなかった」と感じたのか、その理由をできるだけ詳しく答えてください。
質問 3	「納得」ということから思いつくことがありましたら何でも結構ですから書いてください。

質問 1 と質問 2 は納得の生じる、あるいは生じない状況についての問いであり、具体的な経験を思い出し、それについての記述を求めるものである。後に行う状況の分類の際に回答文の解釈に多義性を生じさせないように、質問 2 で納得の生じた、あるいは生じなかった理由を記させた。

質問紙は授業時間を用いて配布され、一週間後に回収を行った。本調査の調査用紙回収率は 51.9% であった。

3. 結果および考察

納得が生じる、あるいは生じない状況とその理由を問うた質問 1, 2 で得られた回答文は 214 文であった。これらの回答文は KJ 法（川喜田, 1967; 1970）を用いて 2 名の調査補助者によって独立にカテゴライズされた。最初のカテゴライズでは 2 名の調査補助者の一致率は 71.96% であった。この後、不一致の生じた回答文に対しては 2 名の調査補助者の討議により分類を行った。この結果、回答文は最終的に Table 2 に示す 29 カテゴリに分類された。

納得という語から得られた連想語の総頻度は 218 であった。この中には重複して含まれている語もあり、重複を除いて得られた連想語は 135 語であった。Table 3 にはこのうち出現頻度が高いものから順に連想語 10 語がその出現頻度とともに示されている。表に示された連想語だけで、全体の出現頻度の 38.99% に達していることから、ここに示されている連想語は多くの被調査者

- (3) 実際の質問は 4 つあったが、最後の質問は本研究とは関係がないので本論文では省略をする。

Table 2 納得が生じる / 生じない状況カテゴリ

1. 社会問題を聞いたとき
2. 物事の結果に明らかな根拠があるとき
3. 人から偏見を受けたとき
4. 物事の結果の原因がわからないとき
5. 勉強がわかったとき
6. 他人の意見を聞き入れたとき
7. 怒られたとき
8. 自分の主張が通らないとき
9. 校則に従わなければならないとき
10. 商品を買ったとき
11. 物事の原理や仕組みがわかったとき
12. 矛盾しているとき
13. 約束を破られたとき
14. 自分で予想したことがはずれたとき
15. 努力が実ったとき
16. 努力が実らなかったとき
17. 尊敬している人の意見を聞き入れたとき
18. 自分の予想した通りに物事がなったとき
19. 注意した相手から逆に怒られたとき
20. 他人から注意されたとき
21. 他人から自分の気持ちを指摘されたとき
22. 順番に並んでいるところへ割り込みされたとき
23. 勉強がわからないとき
24. 他人から誤解を受けたとき
25. 勝負事をしたとき
26. 他人が言っていたことを実際に自分で体験したとき
27. 人の口車に乗ったとき
28. 他人から自分の言っていることを信じてもらえなかったとき
29. 人に冷たくされたとき
30. その他

Table 3 出現頻度の高い連想語

連想語	度数	相対度数 (%)	累積相対度数 (%)
理 解	16	7.34	7.34
う な ず く	15	6.88	14.22
満 足	12	5.50	19.72
わ か る	8	3.67	23.39
す っ き り	8	3.67	27.06
説 得	8	3.67	30.73
な る ほ ど	5	2.30	33.03
賛 成	5	2.30	35.33
安 心	4	1.83	37.16
合 点	4	1.83	38.99

によって連想された語であると考えることができる。表にみられるように高頻度の連想語には納得と近い意味を持つと日常的に考えられている語、たとえば「理解」「説得」「合点」などの語が含まれており、これらが「納得」という語の内包的意味を構成していることが示唆される。

高出現頻度の連想語は「納得をする」ということに肯定的に関係する語が大多数である。しかし「納得をする」ということに関して否定的に関係する語、たとえば「あきらめ」「自己中心」「反発」などといったものも連想語として報告されている。これらの語は肯定的な連想語のように多くの被調査者に共通に連想されることはなく、各単語の出現頻度が少ないという特色を持っている。

III．調査 2

1．目的

調査 2 では、調査 1 で収集した連想語と状況記述文を用い、連想語と納得との関連の深さおよび、状況記述文に記された状況のもとでの納得の程度を評定させる。これらのデータを主に因子分析によって分析し、納得の内包的意味とそれが生じる状況の構造的特徴を明らかにすることを目的とする。

2．方法

被調査者

データの分析対象となった被調査者は大学生 622 名（男子 279 名、女子 343 名）であり、平均年齢は 19.6 歳（18 歳から 45 歳）であった。

質問紙

質問紙はフェイスシートおよび連想語に関する質問、状況記述文に関する質問の 3 つの部分からなっており、A 4 版の小冊子の形態で被調査者に配布された。表紙のフェイスシートには回答の記入についての教示が記され、その下部に年齢、性別、学部と学籍番号、氏名、調査年月日、連絡先の各項目を記入する欄が設けられた。

調査 1 で得られた連想語を納得に関して肯定的な語と否定的な語に独立の 2 名の調査補助者が分類をした。この 2 名の分類がほぼ一致したので、肯定的・否定的な語からそれぞれ調査 1 での出現頻度の多い順に 15 語、計 30 語を選出した (Table 4)。この 30 語それぞれに対して、その語と「納得」との関連の深さを 5 点尺度で評定させた。

状況記述文に関する質問は、調査 1 でカテゴライズされた状況それぞれに関して、そのような状況のもとでの納得の程度(「非常に納得できる」から「全く納得できない」まで)を 5 点尺度で答えさせるものであった。ただし、調査 1 で自由記述文からカテゴライズされた状況記述文は、それだけでは意味が不明瞭になると考えられるものがある。たとえば、「社会問題を聞いたとき」という状況記述文では社会問題の内容が納得の程度に大きな影響を与えられ、と考えられる。また、「怒られたとき」という状況記述文はそれが生成されるもととなった自由記述文には「失敗したことを優しく怒られたとき」、「失敗したことをガミガミと怒られたとき」という、より具体的な記述がある。そこで調査 2 では、調査 1 で得られた状況記述文をそのままの形で用いることをせず、意味の不明確さをできるだけ少なくするように書き換えて用いた。この結果最終的に 31 個の状況記述文が作成され、その各々の状況での納得の程度を評定させた。

状況記述文に関する質問と連想語に関する質問は、順序効果を相殺するためその施行順序を被験者間でカウンターバランスした。質問紙は授業時間を用いて配布され、一部の授業ではその場で施行し、他のものは一週間後に回収を行った。本調査の調査用紙回収率は 91.20% であった。

3. 結果および考察

30 個の連想語は納得の内包的意味自体を表すいわゆる肯定的な語と、納得の得られない要因や状態を表すいわゆる否定的な語を両方含んでいる。Table 4 には各連想語と「納得」との関係の深さについての平均評定値と標準偏差が、平均値の昇順に示されている。評定は 5 点尺度で行われたので評定値 3

Table 4 連想語とそれに対する評
定値の平均と標準偏差

連想語	平均値	標準偏差
理解	4.64	0.65
なるほど	4.59	0.73
うなづく	4.27	0.94
筋の通った	4.22	0.92
賛成	4.22	0.90
合点	4.20	0.90
認める	4.19	0.84
腑に落ちる	3.96	1.16
満足	3.94	1.09
すっきり	3.91	1.19
説明	3.78	0.99
あきらめ	3.71	1.17
説得	3.71	1.06
明確	3.51	1.18
仕方がない	3.41	1.19
説教	3.34	1.20
安心	3.28	1.16
妥協	3.19	1.21
言いくるめる	2.90	1.20
発見	2.90	1.29
素直	2.83	1.28
反発	2.79	1.35
ため息	2.71	1.20
腹が立つ	2.57	1.34
矛盾	2.50	1.28
怒る	2.42	1.30
いらいら	2.35	1.15
落ち込む	2.29	1.16
自己中心	2.26	1.17
強制	2.02	1.16

が尺度の中心点の「どちらでもない」の評定である。平均評定値が3以上には概ね肯定的な単語が、また、3以下の連想語は概ね否定的な単語が集まっている。

平均評定値3以上の連想語18語とそれ以下の連想語12語の評定値の標準偏差はそれぞれ1.03と1.24であり、高い平均評定値の連想語の標準偏差の方が小さな値をとっている。Fig. 1には平均評定値が最高であった連想語「理解」と最低であった連想語「強制」の評定値の分布が描かれている。評定値の標準偏差の大小関係と対応して「理解」では評定値がほとんど4と5に集中しばらつきが小さいのに対し、「強制」では評定値の分布の裾野が広がっている。連想語はいずれも「納得」から連想された語であるが、調査2ではそれぞれの連想語と「納得」との関係の深さを問うたので、否定語については、納得するための条件とはならないというような判断がなさ

れ低い評定値が出現する一方、納得を妨害する条件であるというような判断から、納得と関係があると考えて高い評定値を割り当てた被調査者がおり、結果的に評定値のばらつきが多くなった可能性がある。すなわち上で見られるように連想語の評定値のばらつきが、平均評定値の高い連想語と低い連想語で異なることは、「納得」との関係の深さという質問の多義性が原因であると考えら

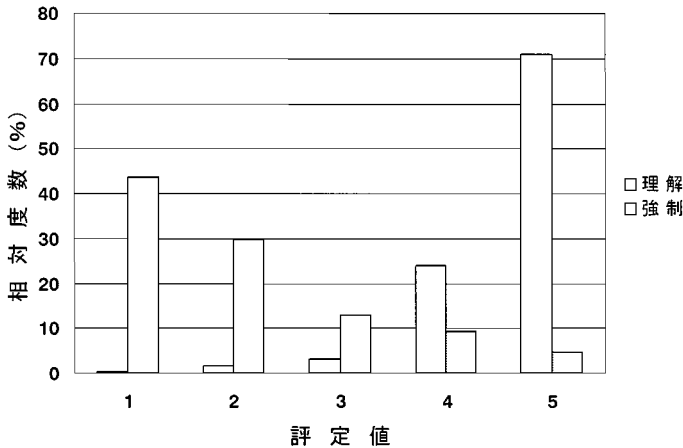


Fig. 1 「理解」と「強制」に対する評価値の分布

れる。しかし、Fig. 1の「強制」の評価値分布に見られるように、たとえ平均評価値が低い連想語であったとしても評価値の分布は鋭い単峰性を示しているので、以下で行う因子分析には大きな影響を与えないものと考えられる。

次に納得という概念の内包的意味の構造を整理してみるために30語の連想語の評価値に対して因子分析を行った。初期解を得るために主成分分析を行い、その後、因子の単純構造を得るためにバリマックス回転を行った。固有値の変化のパターンから因子数を4と決定した。4因子での累積寄与率は39.91%であった。Table 5には連想語とそれに対応する各因子への因子負荷量および共通性が示されている。

抽出された4つの因子はその内容からそれぞれ、「否定的感情・否定的状態」、「了解・明晰性」、「安定感」、「消極的受け入れ」と命名した。第1、第4因子はそれぞれ「納得」の対極を示す要因と考えられ、これらの要因のないうきに納得が生じると考えられる。また、第2、第3因子は納得の内包的意味を構成する要因と考えられる。

因子によって相違はあるものの4つの因子とも同様に感情に言及する連想語が含まれている。また納得には第2因子に代表されるような論理的な明晰

Table 5 連想語と因子分析の結果

連想語	第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子	第 4 因子	共通性
1：否定的感情・否定的状況					
腹が立つ	0.787	0.063	- 0.043	0.092	0.636
怒る	0.784	- 0.164	0.087	- 0.075	0.706
反発	0.739	- 0.060	- 0.174	0.141	0.624
いらいら	0.738	0.008	0.100	0.148	0.586
落ち込む	0.609	- 0.313	0.325	- 0.083	0.612
矛盾	0.595	0.046	- 0.111	0.261	0.493
ため息	0.519	0.133	0.137	0.254	0.416
自己中心	0.512	- 0.094	0.252	0.198	0.427
説教	0.139	0.009	- 0.115	0.073	0.451
2：了解・明晰性					
なるほど	- 0.148	0.680	- 0.135	- 0.013	0.573
すっきり	0.016	0.630	0.288	- 0.127	0.534
合点	- 0.109	0.585	0.054	0.197	0.432
腑に落ちる	0.097	0.562	- 0.016	0.024	0.343
うなずく	- 0.057	0.560	- 0.012	0.106	0.441
筋の通った	- 0.012	0.518	0.151	- 0.087	0.439
理解	- 0.085	0.378	0.065	- 0.124	0.435
説明	0.058	0.354	0.036	0.139	0.519
賛成	- 0.017	0.332	0.146	0.085	0.493
3：安定感					
発見	0.071	- 0.076	0.747	- 0.064	0.590
素直	0.044	- 0.063	0.713	0.070	0.535
満足	- 0.051	0.191	0.650	- 0.005	0.506
安心	0.180	0.160	0.649	- 0.065	0.506
明確	- 0.043	0.135	0.505	- 0.183	0.542
4：消極的受け入れ					
妥協	0.141	- 0.036	- 0.001	0.761	0.610
仕方がない	0.226	- 0.051	- 0.126	0.716	0.647
言いくるめる	0.110	0.152	- 0.047	0.643	0.518
強制	0.421	- 0.014	0.183	0.460	0.489
認める	0.025	0.129	0.162	0.351	0.539
あきらめ	0.224	0.057	- 0.186	0.324	0.240
説得	0.022	0.204	0.103	0.293	0.613
寄与率(%)	13.380	9.395	9.022	8.113	
累積寄与率(%)	13.380	22.774	31.796	39.909	

性と同時に安定した感情も必要とされることが示唆され、納得が単に論理的正当性のみによって生じるのではなく、感情の要因が重要であることが示されている。

状況記述文に関する質問について、納得の生じる状況の構造について明らかにするために、記述された状況のもとでの納得の強さの評定値に対して因子分析を行った。初期解を得るために主成分分析を行い、その後、因子の単純構造を得るためにバリマックス回転を行った。固有値の変化のパターンからは因子数を3とすることが適当であるが、因子の解釈の容易さを考慮して因子数を4と決定した。4因子での累積寄与率は29.99%であった。Table 6には31個の状況記述文とそれに対応する各因子への因子負荷量および共通性が示されている。

抽出された4つの因子をそれぞれ「深い理解、自己関与、感情的受け入れ」、「不当な扱い」、「叱責」、「無力感」と命名した。第1因子は状況記述文から考えて、納得の生じる状況を表していると考えられる。この状況には概ね3つの要因が含まれると考えられる。第1には単に知識や情報を獲得するといった意味での理解に加えて、根拠や原理がわかることといった、より深い理解があること。第2に、たとえば「自分の体験」、「努力の結実」、「予想的中」などのようにその状況に自己が関与し、状況に対して統制可能性を感じている、いわゆる自己効力感を抱いていること。第3に満足や受け入れという感情が関与していることである。このことから、納得の形成にはこれらの3つの要因が必要であることが示唆される。

第2因子から第4因子まではいずれも、納得が生じない状況の記述である。第2因子は自己に対して不当な扱いを受け矛盾や不満を感じる状況であると要約できる。これは第1因子に含まれる3つの要因のひとつである「自己の関与」が否定される状況である。このことから、自己の関与が納得の形成にとって非常に大きな影響を持っていることが示されている。

第3因子と第4因子は内容としては同種の状況が集まっていると考えることができるが、特に第3因子は叱責という場が納得の形成には否定的に働

Table 6 状況記述文と因子分析の結果

状況記述文	第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子	第 4 因子	共通性
1：深い理解・自己関与・感情的受け入れ					
物事の原理仕組みがわかったとき	0.746	0.018	- 0.046	- 0.001	0.577
勉強がわかったとき	0.686	- 0.219	- 0.016	- 0.031	0.553
物事の結果に明らかな根拠があるとき	0.597	- 0.125	0.139	- 0.042	0.481
他人の言っていたことを実際に自分で体験したとき	0.547	0.125	0.089	0.032	0.452
努力が実ったとき	0.517	- 0.363	0.068	- 0.274	0.502
自分で予想した通りになったとき	0.471	- 0.231	- 0.044	0.494	0.570
失敗したことを優しく叱られたとき	0.323	- 0.080	0.217	- 0.185	0.489
尊敬している人の意見を聞き入れたとき	0.337	- 0.117	- 0.080	- 0.305	0.444
値段相応の商品を買ったとき	0.299	0.005	0.118	- 0.120	0.417
物事の結果の原因がわからないとき	- 0.271	0.042	0.008	0.182	0.578
2：不当な扱い					
他人から誤解を受けたとき	- 0.069	0.656	0.068	0.051	0.468
他人から自分の言ったことを信じてもらえなかったとき	- 0.167	0.621	0.070	0.157	0.471
注意した相手から逆に怒られたとき	- 0.057	0.581	0.198	- 0.036	0.401
他人の言うことが矛盾しているとき	- 0.043	0.485	0.085	0.062	0.482
人から偏見を受けたとき	- 0.210	0.458	- 0.044	0.376	0.482
約束を破られたとき	0.048	0.435	0.074	- 0.050	0.397
商品が値段相応でなかったとき	- 0.084	0.213	0.044	0.082	0.473
校則に従わねばならないとき	0.005	0.135	0.085	0.007	0.562
3：叱責					
他人から注意されたとき	0.093	0.129	0.696	- 0.013	0.575
失敗を怒られたとき	0.109	- 0.168	0.625	0.045	0.557
失敗をガミガミと怒られたとき	- 0.107	0.035	0.624	0.171	0.500
自分の主張が通らないとき	0.111	0.289	0.533	0.215	0.465
嫌いな人の意見を聞いたとき	0.009	0.269	0.528	- 0.027	0.389
他人から自分の気持ちを指摘されたとき	0.174	0.140	0.220	0.071	0.408
勉強がわからないとき	- 0.060	0.138	0.176	0.124	0.510
自分で予想したことがはずれたとき	0.111	0.082	0.171	- 0.017	0.525
他人の意見を聞き入れたとき	0.040	- 0.035	0.156	0.002	0.483
4：無力感					
努力が実らなかったとき	- 0.057	0.110	0.227	0.549	0.468
順番に並んでいるところへ割り込みされたとき	- 0.072	0.135	0.144	0.454	0.400
他人に冷たくされたとき	- 0.075	0.389	0.367	0.436	0.509
人の口車に乗ったとき	- 0.153	0.192	- 0.082	0.298	0.485
寄 与 率 (%)	8.951	8.398	7.586	5.050	
累積寄与率 (%)	8.951	17.349	24.935	29.985	

くことを、第4因子は自己の無力感を表していると考えられる。これらの因子は第1因子を構成する3つの要素のうちのひとつである自己効力感の否定であり、自己効力感が納得の形成にとって、自己関与と同様大きな効果を持っていることを示していると考えられる。

以上の結果より納得の形成については、1) 知識や情報の獲得という意味での理解に加えて、原理や原因の理解というような、事物や事象に対するより深い理解が必要であること。2) 当該の事態に自己の関与が必要であること。3) 当該の事態に対して自己効力感を持っていることが必要であること。4) 当該の事態や状況を感情的に受け入れていることが重要であること、の4つの点が必要であることが示された。

IV．総合論議

本研究では納得という現象の特性を明らかにするために2つの調査研究がなされた。1つは納得という語の連想語に基づいた納得の内包的意味の探索であり、もう1つは納得の生じる、あるいは生じない状況の構造分析である。それぞれについて、調査1では連想語、および状況の自由記述文を収集し、それらをカテゴライズした。これらの材料をもとに調査2では連想語については納得との関連の深さを、状況記述文についてはその状況下での納得の生じる程度を評定させ、それを因子分析を用いて整理した。

この結果、納得の内包的意味には大きく2つの側面があることが明らかとなった。第1には「なるほど」、「腑に落ちる」、「筋の通った」、「理解」などの連想語に代表される論理的明晰性や了解の側面であり、第2には「満足」、「安心」などの連想語で表される感情的な安定感の側面である。「理解」は最も出現頻度の高い連想語であり、日常的にも「理解」と「納得」はいずれも「わかる」ということと同様の意味で用いられることが多い。しかし「理解」と「納得」とは完全に互換的に使用されるわけではない。本研究の結果、納得には論理的明晰性と感情的安定性の2つの側面があることが明らかとなった。

「理解」という連想語は本研究では「了解・明晰性」の因子に最も負荷が高い（Table 5 参照）。これをもって、理解が論理的明晰性や明確さにより重点を置いた概念であるとするならば、納得はそれに加えて安定感などの感情的側面も加えた概念であると考えられる。

納得が形成される状況の分析においても、このような論理性と感情という2つの要因に対応する要因が観察されている。状況記述文に基づく分析では納得が形成される状況には、深い理解、感情的受け入れ、自己の関与、自己効力感、の4つの要因が必要であることが示された。これらのうち前二者は連想語から得られた内包的意味の特徴である論理的明晰性と感情的側面に対応するものであると考えられる。

さらに納得が形成される状況では、その状況に対して自己が関わり、かつ自己効力感を持っていることが重要であることが示された。このことは単に情報や知識を獲得するだけでは納得の形成には不十分であり、それらが提供される状況やそれらの内容に対して学習者が深く関わりを持つ、いわば「我が事として考える」こと、が必要であることを示している。

本研究の結果は、納得の形成には「わかる」、「おちつく」、「かかわる」の3つの点が必要であると要約できるだろう。「わかる」は理解を、「おちつく」は安定感や満足といった感情状態を、「かかわる」は自己関与をそれぞれ表している。実証的な学習研究の土台は、その大部分が動物実験によって構築されてきた。動物を用いた学習実験では実験事態のみならずそれ以外の場面でも被験動物を取り巻く環境の全てを統制することが可能である。このような統制は被験動物に「わかる」、「おちつく」、「かかわる」の全てを求めている状況であると考えられる。その意味で学習の動物実験は、納得が最も生じやすい状況下での学習を研究対象としているといえることができる。

一方、ヒトの学習を考える際には、それが日常場面や教育場面であるか、あるいは実験室での実験場面であるかを問わず、動物実験のような完全な環境の統制は不可能である。しかし本研究の結果を敷衍するならば、「わかる」、「おちつく」、「かかわる」の3つの点を保証するような手続きを構築することに

よって、納得が生じるような、すなわち、より深い学習が可能になるということが示唆できる。

本研究は納得に関して、その内包的意味と形成の条件を状況的側面から探った。納得という問題は序でも述べたように、学習、それも *situated learning* のような近年の学習観と関連が深い概念であり、それにとどまらず信念や説得をはじめとする心理学の多くのトピックと関連が深い概念である。本研究は納得に関する研究の端緒であり、今後、このような他のトピックとの関連をはじめとして、具体的な学習、あるいは教育場面への応用などの研究を進めていくことが重要であると考えられる。

References

- Abelson, R. P. 1986 Beliefs are like person. *Journal for the Theory and Social Behavior*, 16, 223-250.
- Flavell, J. H. & Wellman, H. M. 1977 Metamemory. In Kail, R. V. & Hagen, J. W. (eds.) *Perspectives on the development of memory and cognition*. 西林克彦 1997 「わかる」のしくみ 新曜社.
- Lave, J. & Wenger, E. 1991 *Situated learning: Legitimate peripheral participation*. Cambridge University Press. 邦訳 佐伯 胖(訳) 1993 状況に埋め込まれた学習: 正統的周辺参加 産業図書.
- Lifton, R. J. 1961 *Thought reform and psychology of totalism*. W. W. Norton. 小野泰博(訳) 1979 思想改造の心理 誠信書房.
- 西田公昭 1993 ビリーフの形成と変化の機制についての研究(3): カルト・マインド・コントロールにみるビリーフ・システム変容過程 *社会心理学研究*, 9, 131-144.
- 西田公昭 1995 a マインド・コントロールとは何か 紀伊國屋書店.
- 西田公昭 1995 b ビリーフの形成と変化の機制についての研究(4): カルト・マインド・コントロールにみるビリーフ・システムの強化・維持の分析 *社会心理学研究*, 11, 18-29.
- Rokeach, M. 1968 *Beliefs, attitude, and values*. Jossy-Bass.
- 佐伯 胖 1984 わかり方の根元 小学館.
- Schein, E., Schneiner, I., & Barker, C. H. 1961 *Coercive persuasion*. W. W. Norton.